

確かに読む子どもを育てる国語科学習指導 ～3つの対話活動を通して～

要約

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新によって、社会情勢は急速に変化している。その変化の代表として人工知能があげられる。現代社会においては、他者と協力しながら、様々な知識をもとに、情報を取捨選択し、自分なりの考えをつくることで、新たな価値を生み出していくことが求められている。しかし、本学級の子ども達は自分の考えをつくる際の根拠が明確に持てていなかったり、友達と話し合う中で新たな考えをつくるのが苦手であったりするなどの特徴がみられた。

そこで、主題を「確かに読む子どもを育てる国語科学習指導」、副主題を「3つの対話活動を通して」とし、文学的文章を読む学習において、「3つの対話」を位置づけることで、叙述をもとに登場人物の心情や場面を捉え、自分なりの考えをもち、読み取ったことを他者と共有していくなかで、自分なりの考えを確かにもつことができる力を身につけさせたいと考えた。具体的には以下の3つの対話を行うことで研究を進めた。

「作品との対話」 叙述を根拠に感想をもったり、自分の考えをつくったりするために、読みの観点や方法を明確化する。

「友達との対話」 自分の考えを伝え、根拠を検討することで、考えを強化・付加・修正し、自分の考えを再構成するために、読みを焦点化する発問を行ったり、話し合いのモデルを提示したりする。

「自分との対話」 友達の考えとの共通点や相違点を知り、自分自身の学びの深まりを感じたり、評価したりするために、振り返りの観点を提示したり、学びを生かした言語活動の設定をしたりする。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 読みの視点・方法を明確に示したことは、叙述を根拠に感想をもったり、自分の考えをつくったりするのに有効であった。
- 焦点化する発問をしたり、話し合いのモデルを提示したりしたことは、「友達との対話」において自分の考えを強化・付加・修正する上で有効であった。
- 振り返りの観点を提示したり、学びを生かした言語活動を設定したりしたことは、友達の考えとの共通点や相違点を知り、自分自身の学びの深まりを感じたり、評価したりする上で有効であった。
- 一人で考えるのが苦手な子が、自分の考えをつくるための支援
- 友達との対話を自分との対話により生かすための文型や支援の工夫
- 叙述に含まれる気持ちを膨らませるような発問の仕方、つながり方

キーワード 確かに読む 3つの対話 読みの視点・方法

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新によって、社会情勢は急速に変化している。その変化の代表として人工知能があげられる。自ら知識を概念的に理解し、思考し始めている人工知能の登場は、今後の雇用や学校教育の在り方にも影響を与えるものだと予測されている。このような時代において、学校教育では、子ども達が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力や、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして、新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。このように、現代社会においては、他者と協力しながら、様々な知識をもとに、情報を取捨選択し、自分なりの考えをつくることで、新たな価値を生み出していくことが求められている。

また、中央教育審議会答申では「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」と指摘されている。話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながる。このことから、文章で表された情報を的確に理解したり、自分の考えをつくりだしたりするために確かに読む子どもを育てることは大切であると考えます。

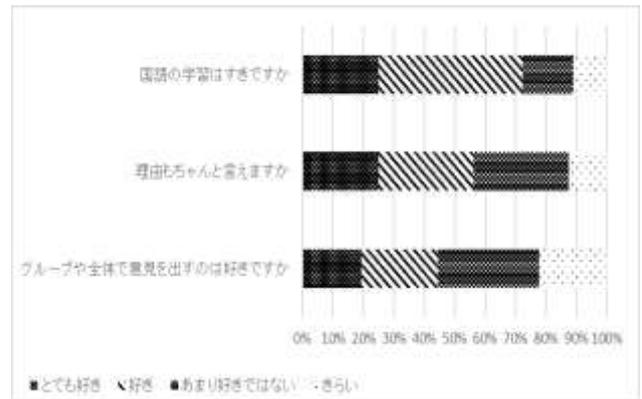
(2) 国語科学習のねらいから

学習指導要領国語編では、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」ことが目標に掲げられている。また、中学年の内容C「読むこと」では、イ「登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること」(構造と内容の把握)エ「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」(精査・解釈)オ「文書を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと」(考えの形成)カ「文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと」(共有)が求められている。したがって、叙述をもとに登場人物の心情や場面を捉え、自分なりの考えをもち、読み取ったことを他者と共有していくなかで、自分なりの考えを確かにしていくことは大切であると考えた。

(3) 子どもの実態から

本学級は男子19人女子16人の35人学級である。子ども達は日頃から、思ったことや考えたことを、発表したりノートに書いたりしてきている。アンケートの結果(資料1)から国語が好きな子どもは全体の62%いることが分かった。しかし、「自分の意見をつくったり、感想を書いたりする時に、なぜそう思ったのかの理

由もちゃんと言えますか」と問うと49%の子どもが言えないと答えている。つまり、約半数の子どもが「自分の考えに対して、根拠が明確ではない」と感じていることがわかる。これは自分が感じたことと叙述を結びつける経験がまだ少ないことや、読みの視点や方法が明確に出来ていないことに要因があると考えられる。そのため、本文のどこに着目すれば登場人物の心情が分かるのかなどの読みの視点や、前の場面と比較するなどの読みの方法を明確にし「どの叙述からどう感じたのか」を問うことで「叙述を根拠に読む子ども」の育成ができると考えた。また、「グループや全体で意見を言うのは好きか」と問うと、苦手だと答えた子どもは56%いた。理由として、「グループの子がなかなか話してくれないから」「自分の考えを真似されるから」といったものが見られた。これは、友達との交流によって新たな考え方に触れたり、自分の考えを強化したりといった、グループ活動の楽しさを子どもが充分に感じていないことが要因であると考えられる。そこで、3つの対話活動を位置づけ、作品と対峙させたり、他者の考えに触れさせたり、他者との意見交流の結果、自身の読みの深まりを感じさせたりすることで、確かに読む子どもが育つと考えた。



【資料1 児童の実態】

2 研究主題の意味

(1) 「確かに読む」とは

確かに読むとは、子どもが本文を正しく読み、場面の様子・登場人物の行動・心情について読み取れる叙述と既存の知識や様々な体験と結び付けながら、自分の考えをつくることである。

「正しく読む」とは、本文の記述を正確に読むことである。子どもの音読を聞くと「～が」を「～は」と読んでいたり、過去形を現在形にして読んでいたりするような様子が見られる。言葉が違えば、読み取れる情報も違ってくる。そのため、本文に書いてある言葉を正しく読むことは確かに読む力に必要であると考えられる。

「既存の知識や様々な体験」とは、ある言葉から物事を想像したり連想したりする、人それぞれがもつ言葉への知識や、日常での体験のことである。(資料2)



【資料2 確かな読み】

具体的な子供の姿を以下のように考える。

- ① 作品の初発の感想をもとに、各単元や一単位時間に、自分が何を知りたいのか、何を読むのかといった課題意識をもって読む子ども
- ② 根拠を明らかにし、作品や友達と対話しながら自分の考えをつくる子ども
- ③ 読み取ったことを、既存の知識や様々な体験と結びつけながら、登場人物と自身を重ねたり、比較したりすることができる子ども

(2) 「対話活動」とは

対話活動とは、読みの課題に対してもった考えや、その根拠を検討することで、自分の考えを強化・付加・修正し、自分の思いや考えを再形成する活動である。本研究においては以下の3つの対話活動を単元や一単位時間の中で行っていく。

対話1 「作品との対話」

単元の初めに初発の感想をもったり、一単位時間において読み取ったことに対して自分の考えをもったりする過程で行う。本文と向き合い、叙述を根拠として自分の考えを形成する。

対話2 「友達との対話」

友達に考えを伝え根拠を検討することで、自分の考えを強化・付加・修正する過程で行う。なぜそう感じたのか根拠を問うことで、自分の考えに自信をもったり、新たな視点に気づいたりする。

対話3 「自分との対話」

友達との共通点や相違点を知り、自分自身の学びの深まりを感じたり、登場人物の思いを再確認したりする過程で行う。単元のまとめや一単位時間ごとのまとめ、振り返りを書く時間などにおいて、根拠をもとに対話したからこそ自身の学びが広まったり、深まったりしたことを自覚する。「今日の学習で」では「どんなことを読み取ったのか」「どの叙述からそう思ったのか」「そこから自分はどう思ったのか」の3つの視点で書くことで、これまでの各対話で着目してきた本文中の叙述にもう一度立ち返る。

これらの対話を段階的に行うことで、読みの課題に対して、叙述と既存の知識や様々な体験を結び付けながら自分の考えをつくるという、確かな読みができるようになる。

3 研究の目標

文学的文章の学習において、確かな読みができる子どもを育成するために、3つの対話活動を位置づけた学習の在り方を究明する。

4 研究の仮説

文学的文章の学習において、初発の感想や疑問などからできた単元や一単位時間における読みの課題に対する自分の考えを明確にするために「作品との対話」「友達との対話」「自分との対話」の3つの対話活動を仕組んで考えの根拠を明確にしていけば、確かに読む力がつくであろう。

5 仮説検証の内容と方法

(1) 検証の対象 小郡市立 三国小学校

研究対象学級 第3学年3組（男子19名、女子16名、計35名）

(2) 検証の内容・方法

授業の中で、場面・登場人物の気持ち・心情について読み取ったことや想像したことを書き表す活動を設定する。その際、根拠とした叙述を書きぬいたり、本文に線を引いたりすることで、根拠とした叙述を明確にする。アンケートや授業で用いたノート・学習プリントで検証を行っていく。そのために、以下のことに重点をおき、検証を行っていく。

① 作品との対話

気持ちが表れている叙述に線を引き、そこからどのような気持ち・様子を読み取ったのかを書き込んでいく。そのために「登場人物の行動や会話・気持ちが表れている言葉」に着目するという「読みの視点」を与える。読みの視点を生かして、自分の考えを書くことができているかどうかを検証する。

② 友達との対話

①でつくった自分の考えをもとにして、どの叙述からどのような気持ち・様子を読み取ったのかを友達と話し合う。自分一人では気づかなかった部分に線を引き、友達の考えを書き込み、自身の考えを強化・付加・修正できたかどうかを、対話の様子や学習ノートなどから検証していく。

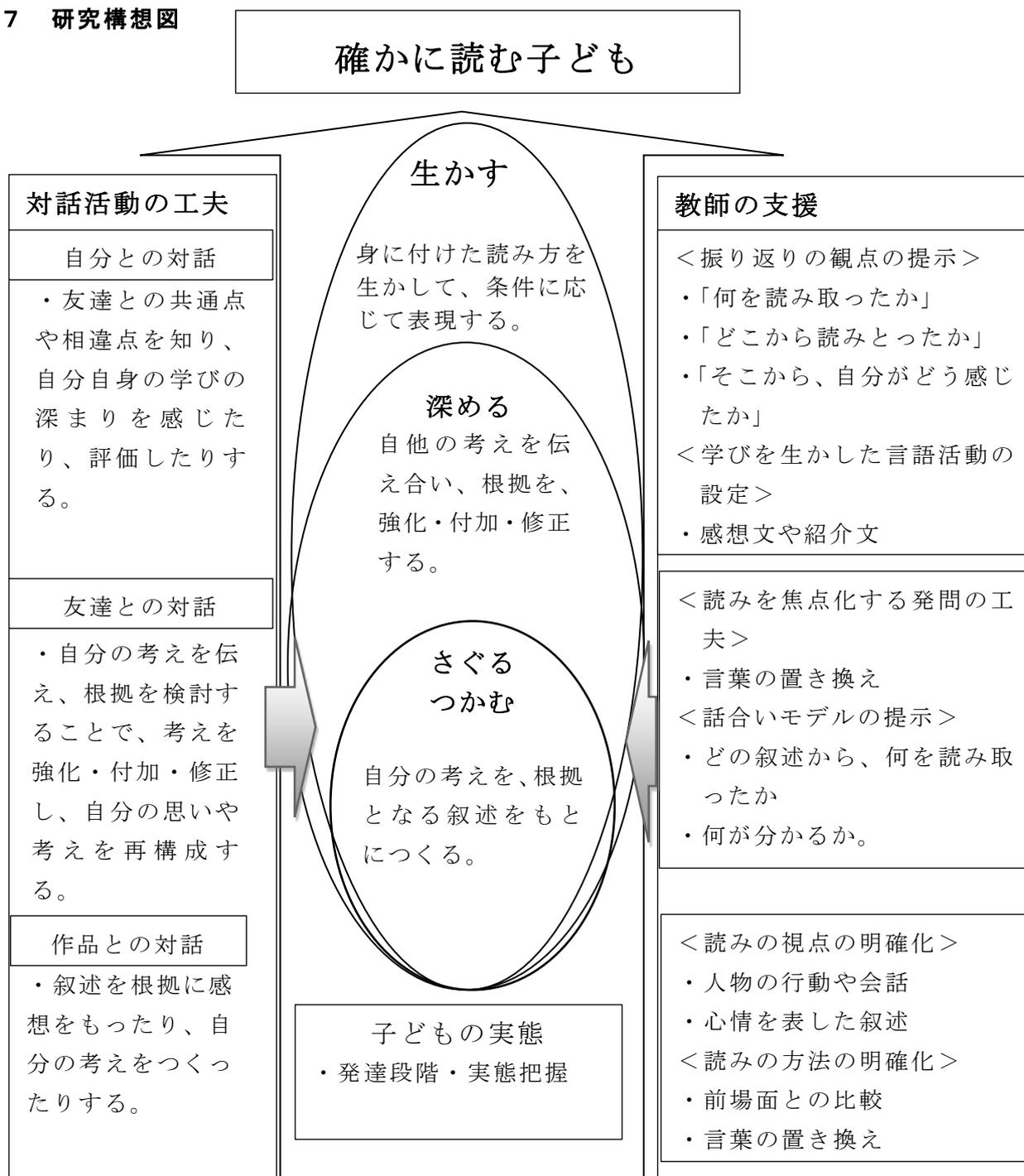
③ 自分との対話

②で強化・付加・修正した自分の考えを生かして「今日の学習で」を書き、その時間の学習をまとめたり、単元末の表現活動において心を打たれた場面や面白かった場面をまとめて、友達に紹介したりする。その際書き方を提示し、「自分が読み取ったこと」「どの叙述からそう感じたのか」等を書けているかどうか検証する。

6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5月	研究計画の吟味・設定	10月	検証授業①
6月	研究計画の吟味・設定	11月	教材研究
7月	子どもの実態調査・研究の構想	12月	検証授業②
8月	研究の構想・教材研究	1月	研究のまとめ・報告書作成
9月	教材研究	2月	研究報告

7 研究構想図



8 指導の実際

実践事例 1

単元 場面のうつりかわりをとらえて、感想をまとめよう

「ちいちゃんのかげおくり」

(1) 単元の指導にあたって

単元の指導にあたっては、各場面の移り変わりを時・場所を表す語句や、登場人物の行動や情景描写などの表現を基にして、場面の様子を読みとる活動を行い、

心を打たれた場面を感想としてまとめることができる子どもを目指した。そのために「ちいちゃんがどんな気持ちだったかを明らかにするために、場面をしっかりと読み取ろう」という課題に対して、読みの視点を確認し、それをもとに自分の考えをつくる活動（作品との対話）、自分の考えを根拠を示しながら友達と伝え合う活動（友達との対話）、対話して強化・付加・修正した考えを生かしながら、学習課題に対する自分の考えをつくる活動（自分との対話）を位置づけた。

本時主眼

叙述に着目したり、前の場面と比べたりして、不安な気持ちだけでなく、家族に会えると信じる気持ちもでてきたちいちゃんの様子を読み取ることができる。

(2) 指導の実際

① つかむ段階

この段階では、単元のめあてをもとに、本時での学習のめあてをたてるのがねらいである。これまでの学習を振り返り、場面ごとにちいちゃんの様子が変わってきたことを確認し「第3場面はどんな場面なのかを読み取り、ちいちゃんの様子を考えよう」という学習のめあてをたてた。

② さぐる段階

この段階では、読みの課題をもとに、「作品との対話」を行い、ちいちゃんの様子を読み取っていくのがねらいである。全体で読みの視点と方法を確認した後、子ども達は学習ノートに自分の考えを書き込んでいった。「泣くのをやっところえて言いました。」という叙述から「家族と離れて悲しい様子」等の考えをつくることができた。

③ 深める段階

この段階では、読み取った自分の考えとその根拠をもとに「友達との対話」を行い、自分の読みを強化・付加・修正することがねらいである。友達の考えを聞くことで、自分一人では考えをつくれなかった子どもが自分の考えをもつことができたり新たに友達の考えを付け加えたりすることができた。しかし、読みの課題に対して、叙述と既存の知識や様々な体験を結びつけるところまでは至らなかった。そこで、「うなずきました」と「深くうなずきました」ではどのように違うのかという焦点化する発問をした。子ども達はまず自分で考え、その後友達と話し合うことで「深くって書いてあるから、お母ちゃん達は絶対に帰ってくるって信じているんだと思う。」「帰ってくると思いたいんじゃないかな。」といった考えをつくることができた。

④ 生かす段階

この段階では、今までに読み深めてきたことをもとに「自分との対話」を行い、自身の学びの深まりを感じたり、評価することがねらいである。「今日の学習で」「この場面を読み取ったちいちゃんの様子」「どの叙述からそのように考えたのか」「そんなちいちゃんを見て自分はどう思ったか」の3つの視点で書かせた。子ども達は「お母さんやお兄ちゃんに会いたくてしかたないちいちゃんだった

た。『お母ちゃんとお兄ちゃんはきっと帰って来るよ。』という言葉から分かった。そんなちいちゃんは不安でかわいそうだと思った。もしぼくだったら『お母さん』とさげびながら、泣いていると思います。」といった言葉で学びをまとめることができた。

(3) 成果と課題

- 「もし自分がちいちゃんと同じ状況なら」と自分と登場人物を比較しながら感想を書くことができた。(今日の学習で 単元末の感想文より)。
- 35人中32人の子どもが「今日の学習で」において自分の考えと、その根拠となる叙述を書き抜くことができた。(学習ノートより)
- 「友達との対話」が意見を出しあうだけになっていた。
- 自分の考えの強化・付加・修正に至らなかった。

実践事例2

単元 おもしろいと思うところを、しょうかいしよう 「三年とうげ」
組み立てにそって、物語を書こう 「たから島のぼうけん」

(1) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、時・場所を表す語句や、登場人物の本文中の行動、情景描写などの表現を基に場面の移り変わりや登場人物の心情を読みとる活動を行い、おもしろいと思うところを感想としてまとめ、紹介することができる子どもを目指した。そのために、次の単元「組み立てにそって、物語を書こう」と関連させ、「おもしろい物語を書くために三年とうげのおもしろさを調べよう」という読みの課題を設定した。また、実践事例1での課題も踏まえ、友達との対話によって自身の考えが強化・付加・修正されたことが可視化できるように以下の手立てを行った。

- ① 「友達との対話」の仕方の見直し。否定しない、気づかなかったところは付け足すというルールのもと行う。また、「今日の学習で」で「友達と話して分かったこと」を書かせることで、自身の学びの深まりを評価する場の設定をする。
- ② 友達の考えを聞いて自分の考えを強化・付加・修正した際は学習ノートに青の線を引くことで、学びの深まりを可視化する。

本時主眼：叙述に着目したり、前の場面と比べたりして、おじいさんの気持ちの読み取ることができる。

(2) 指導の実際

① つかむ段階

この段階では、単元のめあてをもとに、本時の学習のめあてをつくることがねらいである。本時の段落ではどのような出来事が起きたのかを確認し「わざとひっくり返し、転んだ時のおじいさんはどんな気持ちだったのだろう。」という学

習のめあてをたてた。

② さぐる段階

この段階では、読みの課題をもとに「作品との対話」を行い、おじいさんの気持ちを読み取っていくことがねらいである。全体で読みの視点と方法を確認した後、子ども達は学習ノートに自分の考えを書き込んでいった。「とうげからふもとまで、ころころころりと、転がり落ちてしまいました。」という言葉から「もっと転んで長生きするぞ。」「トルトリのおかげで長生きできる。」等の考えをつくることができた。

③ 深める段階

この段階では、読み取った自分の考えとその根拠をもとに「友達との対話」を行い、自分の考えを強化・付加・修正することがねらいである。最初一人では自分の考えをつくることができなかった子どもも、青の線で友達の考えを付け加え、読みを深めることができた。ただ、読みの課題に対して既存の知識や体験を結びつけることができなかったため、「『けろっとした顔』と『けろけろけろっとした顔』では何が違うのだろう。」という焦点化した発問を行った。子ども達はまず、自分で考え、その後友達と話し合うことで「けろけろけろっとの方が元気になった様子が伝わってくる。」「けろけろけろっとの方が気持ちを心の中におさえているように思う。」等と考えることができた。また、「どっちの言葉の方がこの時のおじいさんの様子にあっているだろうか。」と問うとほとんどの子どもが「けろけろけろっと」の方がおじいさんの気持ちが伝わってくると答えることができた。事前の意味調べや、「友達との対話」でそれぞれの言葉でどんな印象を受けるかを話し合ったことが有効であったと考える。

④ 生かす段階

この段階では、今まで読み深めてきたことをもとに「自分との対話」を行い、条件に応じて表現することがねらいである。「今日の学習で」を「友達と話して分かったこと」「この場面の面白かったところ」の2つの視点で書かせた。子ども達は「友達と話して自分気づけなかった気持ちが分かった。」「自分の意見を聞いてくれたり、友達の考えを聞けたりしてよかった。」「この場面の面白かったところは、前の場面では転んでとても悲しくなっていたのに、この場面ではわざと何度も転んでいるのが面白かった。」といった言葉で学習をまとめることができた。また、心情線を描くことで場面ごとのおじいさんの心情の変化や、単元全体を通しての心情の変化をとらえることができた。

(3) 成果と課題

- 35人中30人の子どもが友達との対話活動によって自分の考えを強化・付加できた。(学習ノート・今日の学習で)
- 話し合いを通して「同じ言葉からでも感じ方が違うこと」「人によって面白いと思うところが全然違うこと」に気付いた子どもが多かった。
- 自分の経験や知識と結びつけながら考えをつくれなかった。

9 研究の成果と課題

(1) 全体考察

資料3、4は「実践前」「授業実践2（12月）後」にとったアンケート結果を集計したものである。資料3では実践の結果として「グループや全体で意見を出すのが好きだ」と感じた子どもが44%から90%近くにまで増え、嫌いだと感じる子は0%になったことが分かる。「友達と話すことで色々な考え方を知れる。」

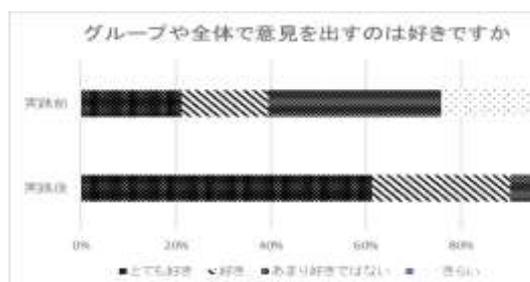
「一人だと分からなくても、友達と考えると分かる。」といった意見がみられた。これは友達の考えを聞いて自分の考えを強化・付加・修正した際は学習ノートに青の線を引かせて、学びの深まりを可視化したことや、「今日の学習で」の中で「友達と話して分かったこと」を書くことで、グループ活動の良さを感じたからであると考えられる。また、資料4から、自分の意見をつくる際に根拠までしっかりもてていると感じている子どもが56%から85%にまで増えたことが分かる。「どういう言葉に気をつけたらいいか分かったから、理由も言えた」といった意見がみられた。さらに、子どもの「今日の学習で」や単元末での表現活動などでは全員が自分の考えとその根拠を書くことができた。これは読みの視点・方法を提示してから「作品との対話」を行ったことと、「今日の学習で」や単元末の表現活動で、自分の考えの根拠となった叙述を書き抜く活動を行ったことが有効に働いたと考える。

(2) 研究の成果

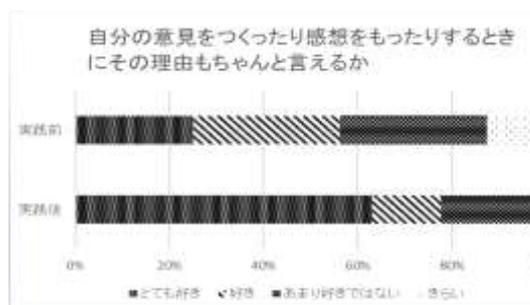
- 読みの視点・方法を明確に示したことは、叙述を根拠に感想をもったり、自分の考えをつくったりするのに有効であった。
- 焦点化する発問をしたり、話し合いのモデルを提示したりしたことは、「友達との対話」において自分の考えを強化・付加・修正する上で有効であった。
- 振り返りの観点を提示したり、学びを生かした言語活動を設定したりしたことは、友達の考えとの共通点や相違点を知り、自分自身の学びの深まりを感じたり、評価したりする上で有効であった。

(3) 研究の課題

- 一人で考えるのが苦手な子が、自分の考えをつくるための支援
- 友達との対話を自分との対話により生かすための文型や支援の工夫
- 叙述に含まれる気持ちを膨らませるような発問の仕方、つなぎ方の工夫



資料3 アンケート結果



資料4 アンケート結果